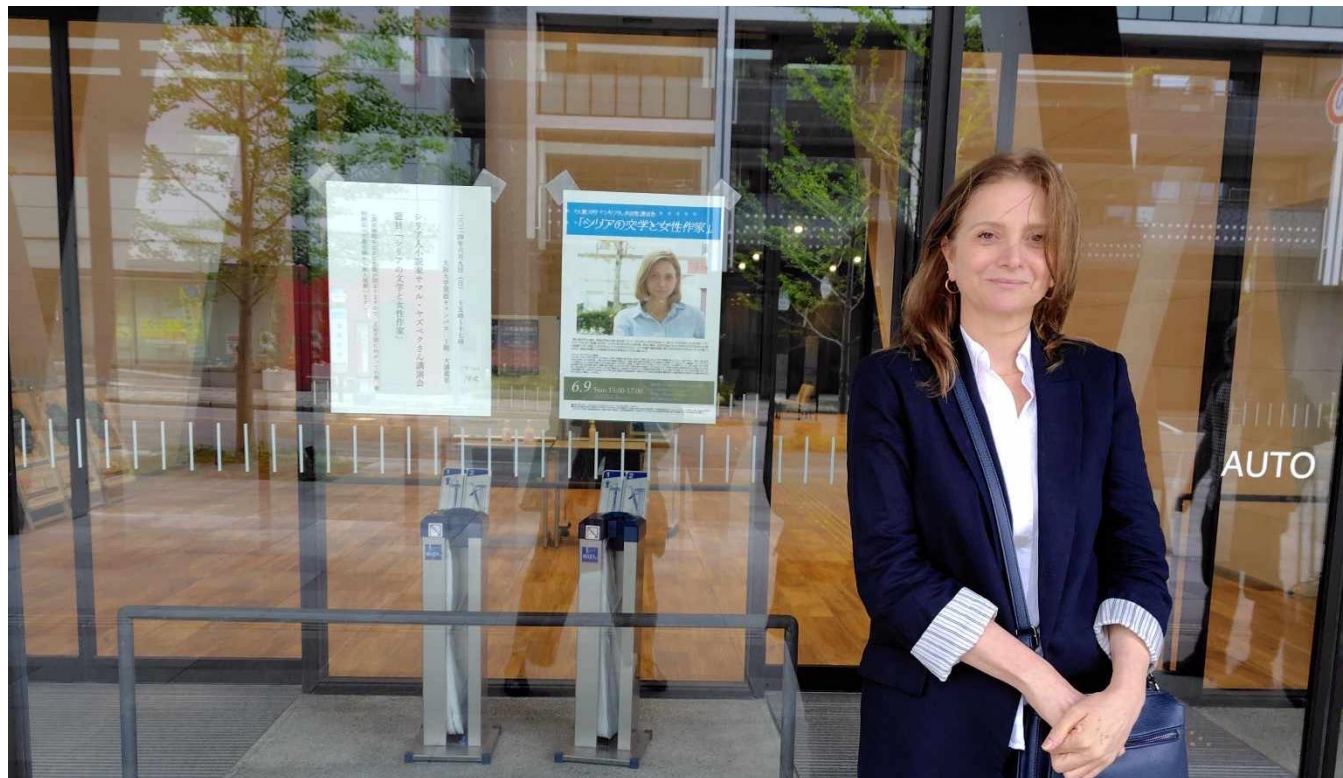




講演録

シリアの文学と女性作家

講演 サマル・ヤズベク

司会 福田義昭 新刊紹介 柳谷あゆみ 通訳 岡崎弘樹

2024 年 6 月 9 日（日）

大阪大学箕面キャンパス外国学研究講義棟「大講義室」

主催：科研費若手研究「近現代アラブ思想・文学における「共存」構想とその実践」（研究代表者：岡崎弘樹）／科研費基盤研究（A）「トランスナショナル時代の人間と「祖国」の関係性をめぐる人文学的、領域横断的研究」（研究代表者：岡真理）／科研費基盤研究（C）「近現代アラブ文学における地理的世界表象に関する基礎研究」（研究代表者：福田義昭）

Samar Yazbek | サマル・ヤズベク |

1970 年、シリア・ラタキア県ジャブラ生まれ。1999 年、短篇集『秋の花束』を刊行、文筆生活に入る。

アサド大統領と同じくイスラーム教アラウィー派の一族の出身でありながら、2011 年以降、一貫して反アサド政権の立場をとり、逮捕・拘束を経て同年夏にシリアを脱出。小説家、シナリオライター、編集者、ジャーナリストとして活躍する一方、女性を支援する NPO 団体を設立。



2009 年、39 歳以下の優れたアラブ作家「ベイルート 39」の一人に選ばれる。2011 年に始まったシリア蜂起の最初の四か月の日記に基づく長篇小説『交戦』を 2012 年に刊行。英訳は同年の国際ペンクラブのピンター文学賞「勇気ある国際的作家」を受賞した。

2015 年に『無の国の門』（白水社）を刊行。20 か国で翻訳され、仏訳は 2016 年度フランス最優秀外国文学賞（エッセイ部門）を受賞した。2017 年に『歩き娘』を刊行、12 か国で翻訳され、仏訳は 2018 年度フェミナ賞（外国小説部門）最終候補作、英訳は 2021 年度全米図書賞（翻訳部門）の最終候補作に選ばれた。最新作は 2021 年の『風の立つ場所』。パリ在住。

ワタン研究プロジェクトでは、人間と「ワタン/Homeland」の関係を人文学的視座からグローバルに考究しています。2024 年 6 月 9 日（日）、プロジェクトの一環として、サマル・ヤズベクさんをお招きし、「シリアの文学と女性作家」と題し、大阪大学にてご講演いただきました。その内容を加筆・修正の上、ここに採録します。

サマル・ヤズベク氏講演

シリアの文学と女性作家

司会 福田義昭 新刊紹介 柳谷あゆみ 通訳 岡崎弘樹

福田：時間になりましたので始めたいと思います。皆さん、今日は遠路はるばる、また雨のなか足をお運びくださいましてありがとうございます。私は司会を務めます阪大のアラビア語専攻の福田義昭と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

もう皆さん、会場にお入りになるときに御覧になったと思いますけれども、こちらがサマル・ヤズベクさん、今日の講演者の方です。一番前にお座りいただいております。

本日の講演のタイトルは「シリアの文学と女性作家」ということで、現代シリアの文学シーンをリードする女性作家の1人でありますサマル・ヤズベクさんが、このたび初来日されました。ちょうど今、私の右手にお座りいただいている柳谷あゆみさんが、あれは2020年ですから4年前に、サマルさんの、記録文学と言ってよろしいのでしょうか、シリアにおける戦争の記録文学である『無の国の門』¹という作品を白水社から出版されました。

それが1冊目だったのですが、今回、新たに出来立てほやほやの本がそこに並んでいます。『歩き娘』（アル＝マッシャーア）²、これは世界中で非常に高く評価されている小説作品です。後から詳しく柳谷さんにお話しいただくように、シリアの悲劇といえましょうか、戦争の中で起きた悲劇を題材に書かれた小説作品です。それが、まさについ数日前に出版されたばかりです。私も実を言うとアラビア語で読んでおらず、不勉強で、柳谷さんがお訳しになった本を2～3日前になってぶわーっと読んで、あと20ページくらい残ってしまして、一番いいところで結末を知らない、どうしようかなという感じで今日は来てしまったのです。そんな感じで、皆さんまだお読みになっていないとは思いますが、この作品について最初に柳谷あゆみさんに解説して頂いて、その後にサマル・ヤズベクさんご自身に講演をしていただくということになります。こういう順番で、5分ぐらいずつずれていっているような感じはしますが、こんなスケジュールで今日はお話したいと思っています。

サマル・ヤズベクさんに関しましては、皆さんがネット上などでご覧になったポスターに書いてあるとおりなのですが、1970年にシリアのラタキア県にあるジャブラという街、地中海に近い所でお生まれになって、1999年に短編集を刊行して文筆生活に入ります。アサド大統領と同じアラウィー派の出身でありながら、皆さんご

¹ サマル・ヤズベク『無の国の門:引き裂かれた祖国シリアへの旅』柳谷あゆみ訳、白水社、2020年。

² サマル・ヤズベク『歩き娘 シリア・2013年』柳谷あゆみ訳、白水社、2024年。

存じの「アラブの春」の2011年以降、一貫して反政権の立場から文学活動、執筆活動、またそれとともにジャーナリストとしても活動されておりました、逮捕・拘束を経て、ついにはシリアを脱出されて、今は亡命の境遇に身を置いているということになります。詳しくはここ（スライド）をお読みいただければいいのですが、例えば先ほど言いました『無の国の門』（2015年）は20カ国語以上に翻訳されております。日本語もそのうちの一つなのですが、フランス語訳は2016年にフランス最優秀外国文学賞を受賞しています。また、今回、柳谷さんがお訳しになった『歩き娘』は、全米図書賞の最終候補作にまで残ったのです。有名な賞ですが、最終候補作にも残ったということで、ご自身が、今までで一番よく書けたとおっしゃっていました。最新作が常に一番いいのかもしれませんが、会心の作であったということで、その作品を中心に今日はお話いただくことになるかと思います。

これが2020年に白水社から出ました『無の国の門』の表紙なのですが、こちらの方が記録文学で、今回訳されたのが『歩き娘』です。もし、後ほどお話を聞かれて、ぜひ読みたいという方いれば、少部数ですが前の方に持ってきていただいております。特別価格だそうです。サインもしてくれるそうです。今日だけです。

一応、この講演会の形式だけ言っておきますと、主催は実は3つの科学研究費補助金に依っております、今日も通訳されているのですが、岡崎弘樹さんの「近現代アラブ思想・文学における『共存』構想とその実践」という科研費の若手研究と、もう一つは、別の科研費基盤研究（A）「トランスナショナル時代の人間と『祖国』の関係性をめぐる人文学的、領域横断的研究」ということで、これは早稲田大学の岡真理先生が代表になっております。さらにもう一つが、私の「近現代アラブ文学における地理的世界表象に関する基礎研究」です。この3つの科研費を使って開催されました。

サマルさんは、執筆活動、ジャーナリストの活動以外にも、シリアの女性のエンパワメントにも非常に大きな力を注いでおられまして、“Women Now For Development”という、これはアラビア語のページと英語のページがございますが、皆さんに今、見ていただいているのは英語のサイトのホームページです。こちらは2012年にサマルさんが設立されたグループなのですが、このように多分野にわたって非常に多岐にわたる活動を展開されている作家であり、ジャーナリストということになるかと思います。

それでは10分になりましたので、5分遅れずつぐらいいで、次は柳谷さんの新刊ご紹介ということで、『歩き娘』についてご解説いただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

柳谷：よろしくお願いいたします。まず、今回『歩き娘：シリア・2013年』の日本語訳刊行をきっかけにヤズベクさんが来日されて、私自身、初めてじかにお会いすることができて大変うれしく思っております。しかも今日この場を設けてくださった皆さま、セッティングしてくださった福田さん、岡崎さん、岡真理さん、それから大阪大学の皆さんに、まず厚く御礼申し上げます。

私は今回の『歩き娘』と、もう1冊、『無の国の門』と、サマル・ヤズベクさんの本を今までに2冊翻訳しております柳谷あゆみと申します。よろしくお願いいたします。

今回『歩き娘：シリア・2013年』というこちらの本は、先ほどお話がありましたように、ほんの数日前の刊行で、恐らくこの場にいらっしゃる皆さんはまだお読みになっていないと思います。本当はもう少し前に刊行できたらよかったのですが、申し訳ありません。私は4年前に『無の国の門』という本も翻訳したのですが、両方とも同じく2011年以降のシリアの状況を扱っていて、テーマは同じなのですが、アプローチが全く違う本になります。そこで、そのあたりのことや『歩き娘』を翻訳する過程で自分がどのように読んだかということも含めて、皆さまにご紹介したいと思っています。

先ほどご紹介がありましたけれども、サマル・ヤズベクさんは1999年に作家としてのキャリアをスタートしています。そして2009年に、当時39歳以下の有望なアラブ作家を選出する「ベイルート39」という大きな文化イベントがあったのですが、その39人の1人に選出されています。つまり、この時点ですでに作家としてすでに第一線に立たれていた方です。しかし、2011年の反体制改革運動「シリア革命」で反アサド政権の立場をとられたということもあって、ここから彼女の執筆、そして本人の活動自体も大きく変わっていったと私は思っています。まず一つは、先ほど紹介がありましたように、女性、子ども支援の社会活動をより積極的に行うようになったということ、それから文学という点でいえば、2011年以降はご自身の体験や取材を基に執筆した記録文学的な作品が中心になってきたということです。

2011年以降では、『交戦（十字砲火）』³という作品を刊行して、それから先ほどご紹介した『無の国の門』、そして『19人の女たち』⁴といった本も刊行されています。

『無の国の門』はヤズベクさんが2012～2013年に（シリアを脱出された後なので）密入国という形で3回シリアに帰国されたとき、アサド政権の支配下ではなくなった解放地域と呼ばれる地域、具体的にはイドリブ県に滞在したときの記録です。この本は、3回にわたる帰国の過程で、戦況がどんどん悪化して、地域社会そのものが急速に変化し、そして、以後の帰国を断念するまでが非常に克明に記録されています。

この本の翻訳は、自分としても、大変いい経験という言い方をするとあれですが、すごく実りのある経験だったと思っています。けれども、正直きつい経験でもあるのです。私自身も昔シリアに少し住んだことがあって、その社会がどのように変わっていったかということが非常に克明に記された文学です。

そして、私自身が思うヤズベクさんの作品の特質なのですが、そう多くを知っているわけではないのですが、まず非常に繊細な感性をお持ちであるということです。とても小さなもの、美しいものにもすごく目を向けることができる。それを一つ

³ 未邦訳。英訳として Samar Yazbek, *A Woman in the Crossfire : Diaries of the Syrian Revolution*, Haus Publishing, 2012.

⁴ 未邦訳。仏訳として Samar Yazbek, *19 femmes - Les Syriennes racontent*, POCKET, 2021.

一つ感受する。そういう繊細な感性をまず強く感じます。それと同時に、現況には非常に過酷な部分があります。その苛烈な現況を常に見つめ続けている。シリアの中にも外にいても、その現況を見つめ続けている。そして、自分の感受と思考を長篇として練り上げて形にすることができる。この繊細な感性と強靱な胆力が、私はヤズベクさんの特質ではないかと考えています。

2011 年以降のシリアの過酷な状況は、シリア人作家が書き続けることを非常に難しくする、創造力をはぎ取るほどのものがありました。その中で筆を休めてしまう方もいた。そうした中で長篇の形で出されているというところが、まず私はすごいと思っています。

そして今回の『歩き娘』、「シリア・2013 年」という副題を付けていますけれども、こちらは 2013 年のダマスカス郊外で実際に起きていた出来事を背景、下敷きとしながらヤズベクさんが書かれた、数年ぶりのフィクションの小説です。フィクションとしての文芸創作に復帰した作品ともいえます。

この話は、なるほどフィクションなのかなというように、非常に不思議な設定で書かれています。主人公は 10 代後半の女の子、女性です。ただ『歩き娘』というタイトルにあるように、生まれて物心が付いてから、自分の意思にかかわらず足が歩き続けてしまう奇癖があるんです。それから、幼いときの経験が元で、自分の意思を言葉の形で発することができない、発話できないという発話障害があります。声は出せるんです。本の音読はできて、クルアーンの音読は非常に見事にできる。でも、こういう人と違ったところがあるために、主人公は学校教育を受けることができず、理解者であるスアード女史という女性の個人教育によって、自分の知性と感性を育てていくことになります。そして思春期に入ると今度は自宅の外にもあまり出されなくなって、さらに 2011 年以降はテレビの視聴もあまりしないという、外からはやや隔絶された状況に置かれているわけです。

この状況が一変するのが、2013 年の夏です。彼女が久しぶりの外出をしたときに、不運な事件が起きてお母さんが亡くなってしまっていて、彼女自身も負傷してしまう。その後、彼女は仲の良かった実のお兄さんに引き取られるのですが、なぜか自分の家ではない所に移ることになります。そうしたら、その地域は常に爆撃を受けている。彼女には何が起きているかよくわからないんです。でも最後には彼女は爆撃を受けている地域で 1 人だけ地下室にとり残されてしまいます。しかも彼女は常に歩き続けてしまう癖があるので、手首をひも状のもので結んで、どこかに必ずつながれている状況にあります。その状態で 1 人地下室に残された彼女は、やがて誰かはわからない、いつか読んでくれるであろう「あなた」という人を仮定して、その場に 1 本だけ残っていたペンを使って、自分が今までどのように生きてきて、何を考えているかという手記を残す。その手記がこの本ということになっています。

不思議な設定の本です。この本は、もしかしたら私の訳文の問題もあって最初は読みづらさを覚えるかもしれませんが、私は、読んでいくほど、読んで読み重ねるほどに、どんどん解像度が上がって、いろいろな気付きがあって、面白くなる本だと思います。

っています。

一つ前提知識として挙げておきたいことがあります。この本は非常に理不尽な展開に見えると思いますけれど、その背景には、2013年の夏にダマスカス郊外の東グータ地域に対して行われた、アサド政権軍による包囲戦があります。彼女を引き取ったお兄さんが反体制派に関わっていたために、反体制派の制圧地域である東グータ地域に彼女は入ったんです。そのせいで常に爆撃に遭って、町自体が封鎖されていて、食べ物などが来ないという状況に置かれている。ここが重要なところかと思います。町自体が封鎖されている。さらに地下室の中にいる。彼女自身は手首がつながれた状態で、何重にもわたる拘束を受けている。もう一つ言うと、彼女は女性ということもあって、保守的な考えの人が多いところにいたために、服で常に身を隠さなければいけない。顔もできれば隠さなければいけない。そういう衣服による拘束もあるのです。幾つもの拘束の中で、彼女は最後に誰ともつかない「あなた」に対して自分を語る、徐々に自分を解放して人とつながることを考え始めるという、彼女自身の内面の成長と解放、それから外からの封鎖という二つの対比も非常に興味深い本であると思います。

本書の背景が非常に凄惨な状況であったことはわかります。この間にこの地域にはサリンによる化学攻撃も行われています。ただ、そういう凄惨な事件もさることながら、むしろ彼女の内面から発露していく感性や思考、それから彼女の驚くべき読書経験が強く印象に残ります。『星の王子さま』『不思議の国のアリス』、それからサアーリーの『言語学』など、相当難しい本まで彼女は読んで自分のものにしている。それから、読書好きの方なら結構やったことのある、「私ならこの設定を足す」といった二次創作的な発想もかなり出てきています。彼女の思索がとても面白い作品でもあります。

読んでいって、最終的に、この歩き続けてしまう娘とは一体何だったのだろうか、と思います。これは皆さんで自由に考えていただけるといいかなと思うのですけれども、この本には「私をつかさどる頭脳は常に下の方、足の方にある」というような言葉がたびたび出てきます。ここには、歩くことと思索することの結びつきが見えますし、さらに、これは外れているかもしれませんが、少しうがって考えれば、上にいる大統領などではなく、下にいる人々が自発的に、自律的に考えて動き出していく。そういうシリアの状況とも重ね合わせて見ることはできるのではないかと思います。

今回の翻訳は難航を極めて、編集者の方にも大変ご迷惑をおかけして、どうにか本ができました。簡単な紹介ではありますが、ぜひ読んでいただければと思います。ありがとうございました。

福田：柳谷さん、ありがとうございました。2013年にグータが包囲された中での化学兵器による攻撃があり、サリンが使われたといわれていますが、今現在、その包囲されている状況というと、ガザのことがどうしても頭に浮かんでくるような時代です。アラブ世界では、シリアもそうですが、シリア以外のパレスチナでもスーダンでもイラクでもイエメンでも毎日大勢の方が亡くなっているわけです。そういった情勢の中

で、一人の女の子がいかに生きたかという設定になっているということです。

それでは、これからサマルさんご自身にいよいよご講演をしていただきたいと思います。横にいる亜細亜大学の岡崎弘樹さんが通訳をしてくださいます。では、どうぞ。

サマル：今日は皆さん、ご出席ありがとうございます。シリアの戦争について書いた私の本について簡単にご説明したいと思います。2011 年以前のことは、重要ではないということは決してないのですけれども、やはりその後に関わったことがとても重要なので、2011 年の戦争以後のことについてお話ししたいと思います。

ガザで戦争が激化している今、私がカタールのドーハから来ているのは、皆さんは奇妙だと思われるかもしれませんが、私はドーハで 2 カ月間、ガザでの虐殺から逃れてきた人たちの施設にいました。そこには手足を失った者や傷を負った者がいて、私はパレスチナ人生存者の証言を記録していました。負傷者のための施設にとどまって、そのとき私は、自分が文学的な経験について、そして私が追放された国、要するに祖国であるシリアで起こったことについて書いているのは、ガザの事情からすると皆さんにとっては不思議に思われるかもしれません。さらにまた、ガザの状況から私が奇妙だと思うのは、人間の野蛮な性質について再考しなければいけないということです。

小説家、活動家、作家、ジャーナリストとして、私は 14 年間、戦争の中で生きてきました。戦争は常に私の頭の中にあり、私の中には永遠の地獄があります。にもかかわらず、私は文学や何か他の方法で書こうと試みてきました。私は知識人や作家として真の行動をとるべく、言葉による抵抗に努めてきました。いかに代償が高くても、いかに苦しみ、そして自らが粉々になっても、そして抑圧されても、常に正義、公正、真実を求める、そのような行動に努めてきました。

若いころから私は沈黙する社会に反抗し、それを批判し、それに対して自ら革命を起こすということを自分の関係性、モットーとしてきました。17 歳のころに、伝統的もしくは後れた慣習によってむしろ縛られる社会、特に女性の権利をないがしろにする社会に反抗する決意を固めました。伝統的なあらゆる形の社会制度から独立・自立して生きること決めました。自分で世界を広げて火種をあえてつかむ、すなわちそれを書くという、その夢に突き動かされていました。1999 年に最初の本を出版して以来、今に至るまで、私は自らの指で火種を握りしめながら執筆しています。けれども、その火種は私を焼き殺すことはなく、むしろ私を生き返らせてくれたのです。

一体誰が言葉なしで生きていけるのでしょうか。言葉を信じない者、言葉を人生の柱にしない者、言葉を想像力や文学の舞台にしない者は作家とはいえないでしょう。私はいつも自分にそう言い聞かせています。

2011 年以前には、私は小説や物語、テレビの脚本を執筆していました。独裁政権に対するシリアの民衆蜂起が始まったとき、私はジャーナリストでした。2011 年にチュニジアやエジプトで革命が起こったときは、私は女性の権利を求める活動家でした。そして自分にこう言い聞かせました。「私はこの変化の一端とならなければならない。そして抵抗を続けなければならない」。そしてデモに加わり、私はシリアで何が起こっ

ているかについて日誌を書き始めました。私と、男女を問わず活動家、知識人らは、活発な取り組みの空間を生み出すことになりました。

私は 2012 年に『交戦』という本を出版しました。それは革命の最初の 4 カ月の物語を語る文学と記録をあわせ持った著書です。この本は、革命、暴力、人間性へのおぞましい侵害についての私が集めた証言にとどまらず、シリアの都市、町、村でどのように抗議行動がなされたのかを地図・図面として記録する試みです。私はあらゆる都市を旅して、そこで何が起こったのかを記録するために、彼ら、彼女らの証言を録音しました。アサド政権の監獄に拘束され、殺された犠牲者の家族にもインタビューをしました。

2015 年には『無の国の門』を出版しました。それは私自身が拘留や追跡、脅迫を受けてパリに向けて出発した後、改めてシリアに戻ってきて、そのシリアの状況を記録したものです。この本は戦争の最前線でジャーナリストティックに書いたものであり、同時に、文学的な記録日誌です。シリアの革命が大きな世界戦争に変わってしまい、イスラム国 (IS) がシリア北部に侵入しました。それはまさに 2012 年から 2013 年の間のことです。

私はこの最前線で記録やジャーナリズムの仕事を続けながら、同時に女性のエンパワーメントに関わる市民社会団体を設立することにしました。その団体の名前が Women Now for Development です。2012 年に設立し、12 年間にわたって現地および近隣諸国、そして難民キャンプで活動する中で最大限のネットワークをつくることができました。私たちは現在でもこの活動を続け、いくつかの国々でその取り組みを拡大しています。

当時から私は、文化や公共の課題に関わる人間として、たとえ亡命作家になったとしても社会を放棄してはならないと考えていました。つまり国内にいる人々と、移民せざるを得なかった人、そして亡命せざるを得なかった人々の架け橋にならないといけないと考えていたのです。

戦争の最初の 5 年間、つまり 2011 年から 5 年間は、私は文学 (小説) を書くことができませんでした。なぜなら、私の周りではあまりにも暴力が激しく、私の優先事項は、革命、戦争、ジャーナリズム、そして記録における活動家としての取り組みだったからです。しかし、そういう活動をするものですから、私は 2 回にわたって追放された作家となりました。1 度目は 2011 年の祖国からの追放でしたが、2 度目は、私が属している、決して戻ることのできない、何の制約もできない絶対的な基盤としている唯一の真実からの追放でした。すなわち、それは私が小説家として、文学者として、「文学の真実」から追い出されてしまったということです。そうです、私は小説を書かずに生きていけません。こうした状況は私の人生をいっそう困難にしました。なぜなら、私はあの暴力の最中に文学との関係において、自分にとって最も大切な真実に立ち返ることができなかったからです。

それから私は、ついにこの小説『歩き娘』を出版しました。それは革命と戦争が始まって 6 年たってからの小説でした。この小説は少し奇妙で痛みを伴う物語です。私

は活動家で弁護士のラッザーン・ザイトゥーナ⁵の人生について常に考えていました。ザイトゥーナは2013年8月にダマスカス郊外で起きた化学兵器による虐殺に関して、日誌という形で記録していました。当時私はスカイプでラッザーンと連絡を取っていましたが、彼女は武装したジハード主義組織に誘拐され、行方不明となりました。当時私は、暴力と戦争に立ち向かう上で、想像力と文学の重要性についていかに語るかということについても模索していました。ラッザーン・ザイトゥーナに敬意を表しながら、まるでパズルを解くように、この小説を書くアイデアを温め、出版したというわけです。文学と想像力は重要ではありますが、現実的に当時の基盤となったのは、2013年8月の化学兵器による大量虐殺の物語です。この小説『歩き娘』はアラブ世界の全ての女性の物語であり、抑圧の物語であり、そして何よりもアラブ世界の私たちが必要とする知性的な行為、知性的な努力を伴う私たちの物語です。

原題のアル＝マッシャーアの説明にもなりますが、「歩く者たち」というのは、元々は哲学者アリストテレスの弟子たちを意味します。アリストテレスは当時、歩きながら弟子たちと議論したといわれています。この小説のヒロインであるリーマーは、不可解で現実離れした物語のイメージにもかかわらず、世界を歩く女性たちの1人です。つまり彼女は、歩き、考え、議論し、人生の新しい意味を生み出していくタイプの女性なのです。

そして2019年に『19人の女性たち』という本を出版しました。ここでは私は再び記録という形式に立ち戻って、言葉を通してシリアの新しい地図・図面を描こうとしました。私は、地理的にほぼ全てがカバーされるように、シリアの幾つかの都市や町、村から数十人の女性を選びました。女性たちは幾つかの社会階級や宗教、宗派、そしてさまざまな政治意見を持つ者に分かれています。とはいえ、彼女たちは概してアサド政権や過激な原理主義勢力に対して抵抗する人々です。彼女たちの物語を通して私たちはシリア人が全く知らない、そして全世界も知らない、シリアの異なるもう一つの物語を伝えようとしてしました。

私は、個人的なものは政治的なものだと思っています。人間の生活や個々人の違いに興味があり、言葉や一般の人々についての記憶を通して、集合的な記憶を再構築することに執着しています。と申しますのも、女性たちは自分たちの生活に関わり、そこに入り込んだ複雑な暴力を解体することができると私は信じてきたからです。暴力は、ファシストの独裁政権との対峙、そして保守的で閉鎖的な社会、さらには武装した過激な宗教原理勢力と向き合ったときに始まりました。さらにその暴力は、革命に参加したその活動の同志、さらには教養ある男性や文化人といわれる人たちによってももたらされました。こうした人々は結局、伝統的な男性社会のパターンを脱却することはなく、家父長的な社会の価値を保持したままだったからです。

そして、2021年に私は小説『風の立つ場所』⁶を出版しました。この小説は私がそれ

⁵ ラッザーン・ザイトゥーナ：シリアの人権派弁護士。シリア革命地域調整委員会設立メンバー。

⁶ 英訳として、Samar Yazbek, *Where the Wind Calls Home*, World Editions, 2024.

までに書いた全ての小説と全く異なり、暴力の言語から離れながらアラビア語との新しい関係を探ろうとした作品です。フランス語が私の第2の言語となって、母国語であるアラビア語との関係が変わりました。そうした後に書いたものです。この小説は、地中海沿岸部の山岳地帯で、瀕死の状態に死に抵抗するシリア人兵士についての長編詩のような形で始まります。この兵士は自分の死に抵抗しているのか、もしくは私たちを、彼の子ども時代や村の悲惨な現実に戻すような悪夢のような世界をつくり出しているのかは分かりません。私はシリアの戦争中、虐殺で命を落としたその地域、地中海沿岸部、山岳地帯の貧しい人々の多くの層について書きました。こうした人々は、結局、自分たちが犠牲者であるということも知らない人々です。

あまり長くなってはいけなくて、今回は簡単に私がどんな経緯でこの本を書いたのかということについて説明しました。それと同時に文学という形式かはさておき、戦争について記録することも含めて書くという行為の動機についても説明したわけですね。スーザン・ソントグの書名である『他者の苦痛へのまなざし』⁷が私に影響を与えています。つまり、「他者の痛みに対して目をつぶってはいけなくて」というものです。私は人の痛みに目をつぶらない人に属したいと思っています。それこそが、私の行動を生み出しているのです。どうもありがとうございました。

質疑応答

福田：では、サマル・ヤズベクさんご自身も、今日の講演もですが、皆さんと直接の対話を望んでおりますので、50分ぐらいたっぷり時間がありますので、どんなご質問でもいいので、していただきたいと思います。コメントでも質問でもよろしいので、いかがでしょうか。

質問者 1：今のシリアでアフガニスタン出身のある作家の本を最近読んでいたのですが、その方は別にアフガニスタンにいらっしゃるわけではないにもかかわらず、自分の国を愛していらっしゃるのだと思います。ヤズベクさんにとって、自分の国を愛するというのはどういうことなのか、それから、自分の国を愛するためにできることは何かをお聞きしたいです。

サマル：パレスチナ出身の詩人マフムード・ダルウィーシュ⁸が言う通り、私たちは「希望を育む」ということが大事だと思います。私たちの現代の時代においては、人間性をめぐる、そして祖国をめぐる概念そのものを捉えるのは大変難しいことです。特にデジタル革命が起こった後は、人間性、そして祖国に関するコンセプトそのものの自体

⁷ スーザン・ソントグ(1933-2004)：アメリカ合衆国の作家・社会運動家。『他者の苦痛へのまなざし』北條文緒訳、みすず書房、2003年。

⁸ マフムード・ダルウィーシュ(1941-2008)：パレスチナを代表する詩人。

が揺れているということです。そもそもナチズムの人々も結局、愛国の名の下に殺戮を犯していました。場所との関係、祖国への帰属意識やアイデンティティの関係は、今とても曖昧になっています。

しかし、私は、地理的な境界線のある、祖国というアイデンティティをもったある人間集団の出身です。その人間集団は、シリアという国で民主主義革命を実現するという夢を持っていました。

そもそも国を愛するということを議論することが難しいですが、基本的な考え方としては、その国の人々について考えるということではないでしょうか。新しい世代、新しいシリアをつくるために犠牲となった人々を考えるということです。国が戦火に見舞われる中で、誰かに手を差し伸べるということは、もしかしたら敵対する人々の両方に手を差し伸べることにもなります。また、どこに行っても、どのような場所を訪れても、常に公正であること、要するに自分にとってではなくて他者への公正な立場を考えることも、国を愛するということと関わってきます。

ですから、祖国の外で活動するということは、文化や文明を通して、政治活動や社会活動、小説や詩を通して、争う人々に対して手を差し伸べて橋を架ける、そしてそれによって暴力も根絶するという行為だと思います。自分は別の国の地域に足を付けているかもしれませんが、けれども、頭の中では自分が生まれたその土地に対してやはり執着している。それが国を愛するということではないでしょうか。

質問者 1：自分の中で、今、ネットなどでいろいろなことが知れる時代で、自分の国の外にいて自分の国を愛していると言う人は、すぐ簡単にたたかれたり、そういう目に見えるもので結構、簡単に批判されたりすることもあります。誰かに証明してもらったものでないと自分の国を愛していると言えないのではないかと悩んだりもしました。でも今のお話を聞いて、形式ではなくてやはり内面、その人たちのことをいかに考えるかということが大事なのだと知りました。

福田：ありがとうございます。では、次の方どうぞ。

質問者 2：シリアの大衆は政治において何を願っていますか。要するに何に希望を持っているのでしょうか？

サマル：シリア国民はもはや一つではありません。シリアは5つの国の軍隊に占領されています。ですので、一つのシリアを想定する、それ自体が虚偽ということです。シリアの中にロシア、イラン、アメリカ、トルコ等の基地があって、さらにアサド政権の武装民兵によって国民が徹底的に分断されているという状況です。12年間にわたって続いた戦争によってシリア国民の間に大きな亀裂が生じています。

しかし同時に、さまざまな宗教、宗派、階級、集団を横断する形で一つの夢も共有されています。それは、独裁政権のアサド政権が崩壊した後、民主的で統一された新

しいシリアをつくるという夢です。世界の各地からシリアにやってきた過激な宗教原理主義勢力を追い出すということも、その夢の一つであります。

政治について語るのはとても難しいです。というのも、実は中東地域全体として徹底的に分断されている状況があり、大変残念ながら地域全体を再編するような砂嵐が起こっているのです、先ほど言った夢について政治的に語るのは難しいです。

10 年以上にわたってシリアで起こってきた大量虐殺、ジェノサイドに関しては、国際社会が沈黙を保ってきました。それはまさに、今ガザで起きていることと全く同じです。今シリアを占領している勢力は、そこでサッカーをしているわけではなくて、ガスや石油、水などの天然資源を取り合っているという状況です。グローバルなレベルでゲームが行われ、戦争やジハード主義者の台頭を引き起こし、シリアの民主革命を頓挫させたのです。それは結局、シリアの天然資源を奪い取るための経済的なゲームです。

ですから、私たちの夢としては、作家としても活動家としても民主主義的な国をつくりたいけれども、やはりそれは遠い将来に何とか実現したいと望んでいることです。と申しますのも、私たちの目の前には巨大な兵器庫があり、また今は新自由主義という経済の動きの中にいますので、やはりそれはまだ遠い夢の話です。ただ、私がもし希望を持っているとすれば、私は戦い続ける、負けることがあっても最後まで戦い続けるということです。

質問者 2：ありがとうございました。

福田：ありがとうございます。まだまだ時間がございますので、今日のお話につながることも、またそうでないことでも、素朴な質問でもよろしいかと思います。あるいは文学の方面からでもかまいません。

質問者 3：今日は貴重なお話をありがとうございます。私が聞きたいのは、シリア全体にもいろいろ問題があると思いますけれども、先ほど本も購入させていただき、失礼ながら初めてこれから読ませていただきます。先ほどのお話の中で、17 歳のときにこういうことをしていこうと決められたというお話がありましたが、17 歳のときは、まだシリアが今みたいな紛争という状況にはなっていなかったと思います。実は私たちは 2000 年ごろにシリアに滞在しておりました。現在はとても危険ですけれども、当時基本的には平和で穏やかで、人々もとても親切でした。17 歳のときにこういうことを始めるきっかけになった、そして今に至るという、そのきっかけをお話しいただけると、この本をこれから読ませていただくに当たり、背景が見えて理解が深まるかと思っています。そのあたりを教えていただけるとありがたいです。

サマル：私は 1970 年生まれで今 55 歳になりましたので、1990 年代終わりから 2000 年代初めには私は 17 歳どころではなくて、もう少し年上でした（苦笑）。

17歳のときは1980年代でしたが、そのときには左派政党のメンバーが拘束されたりということが実際にありました。そのときはやはり私は世界を変えるということにすごく強い志を持って、特に女性が社会の中で参加し、活動し、そして家父長的な伝統的な社会から何とか脱却する、独立するという夢を当時、持ちました。アラブ社会では、結婚なり、外出なり、家への訪問なり、どこかの学校に入ったり出たり、その他のいろいろなことに関して、必ず父や兄、夫など家族の中の男性の庇護が必要になります。そうしたときに、その家父長的な社会の仕組みから脱却したいという反抗的な気持ちがありました。

当時、1980年代にそういう考え方を持つこと自体がスキャンダラスでセンセーショナルではあったのですが、特に1980年代を今から考えると、今の方が女性の自由や権利が実は後退していると思います。当時、左派政党、要するにマルクス主義などの思想もありましたけれども、私の家は封建制度の残る地域の名士の家であり、同時に家父長的な仕組みを持っていたということです。このお答えで理解していただけたでしょうか。

質問者3：ありがとうございます。近頃はSNSなど、いろいろな周りのご家族の情報が入ってくる環境が整っていますけれども、当時は、特にシリアにいと、そういうものがすごく入りにくかったのではないかと思います。インターネットなども民間レベルでオープンになったのはすごく後でしたし、どこでそういう感覚というか、そういう意識を元々持っておられたのか、もしくはどこからそういう情報、民主的な考え方や女性の人権など、そういうものが入ってくるような環境におられたのか。そのあたりを聞かせていただけるとありがたいと思います。もう一つは、先ほど、女性の権利がむしろ後退しているとおっしゃっていましたが、それはシリアにおいてでしょうか。それとももっとアラブ地域全体ということでしょうか。

サマル：インターネットがあるかないかという、その考え方自体がオリエンタリズム、要するに西洋の側が東洋の方を見下して、東洋の人、オリエントの人、中東の人は何も知らない、読んでいないというような見方によって否定されているものです。私は12歳のときにアメリカ文学をたくさん読みました。インターネットがなくても、実際には学校なり、本なり、翻訳があって、いろいろな考え方は伝わっているのです。シリアのみについて語っているわけではありません。偉大な文明はあるのです。たとえば、シリアにはアブー・アラー・マアッリー⁹という有名な詩人がいまして、それはダーウィンやアインシュタイン、それからダンテの『神曲』の「地獄篇」など以前に、『許しの書』という詩集においてダンテと同じようなことを書いていた人もいます。ですから、私たちは歴史的に偉大な文明や文化的な遺産を引き継いでいるのであって、

⁹ アブー・アラー・マアッリー（973-1057）：アッバース朝時代の盲目の哲学者・詩人。アレppo近郊のマアツラの出身。

インターネットの影響などはそれほど重要ではないのです。

もちろん、シリア社会に一石を投じる政治運動・解放運動もありました。1920年代にシリアの女性で、ドイツで博士号を取った女性もいます。質問者の方がシリアのどこにお住まいで、何を見たのかはちょっと分からないのですが、やはり世界でシリアを見る際に文明観なども特定の固定観念があります。今日、私はここで講演をして皆さんと対話するのは、その固定観念を打ち破って解体するということも望んでいるからです。

母親の世代、つまり1950年代から1960年代にかけてですが、映画とか演劇とか非常に盛んで、読書や映画のクラブ、地下活動を行う政党もありました。そして翻訳活動も大変盛んでした。1970年代から1980年代にかけ大きな翻訳の動きがあって、アントゥーン・マクディシー¹⁰という方が中心となって翻訳活動を率いました。そして私はフランス文学を、フランス語で読む前にアラビア語でほとんど読みました。そのような文明的・文化的な発展があったのですが、アサド独裁政権によって破壊されたのです。シリアだけではなく、アラブ諸国の独裁政権は同じくこうした発展を阻んできました。

文明をめぐる固定観念に関して一つジョークを言わせてください。私は12年半から13年間にわたってフランスに住んでおりますけれども、「あなたは本当にアラブ人？」とやたら聞かれます。「本当に？」「本当に、本当に？」と聞かれ、信じてもらえないのです。そのような不可思議な見方、観念がアラブ世界に向けられ、しっかりと根付いているからです。

質問者3：すみません、私の聞き方が失礼だったかもしれないのですが、私が住んでいたところに政府の情報政策などもすごく厳しいという印象がありますので、インターネットなども、もちろん文化的レベルが低いとかそういう意味ではなくて、すごく情報規制が厳しい中で、もちろんそういうことを欲していて、文化的なことも、ご存じのとおりたくさん私の周りでもいたのですが、そういう方々に、少し政治的なこともあって、自分たちがいたときにはそういう質問がなかなかできなかったもので、ここでお伺いできたらいいなと思ってご質問させていただきました。どうもありがとうございました。

サマル：本当にそういう質問に深く感謝したいと思います。だから、本当にそのような質問をしていただきたいと思います。ありがとうございます。

福田：では、どんどんいきましょう。

¹⁰ アントゥーン・マクディシー（1914-2005）：シリアの哲学者、政治活動家。1965年から2000年までシリア文化省で多数の編纂・翻訳プロジェクトを主導した。

質問者 4：文学と実世界の関係について質問させてください。私の考えでは、政治的話題を文学に持ち込むということは、文学を通して実世界に議論を働きかける役割を果たすと思っています。ヤズベクさんが作家として、文学が実世界において果たす役割、もしくは文学に期待する役割を教えてください。

サマル：文学が政治的現実に与える影響は大きいです。たとえば教育や自由や民主主義といった考え方など、まずそういうことに影響を与えるのが文学です。古典的な文学についても同じことが言えると思います。ドストエフスキーやトルストイは文学を通じて政治について関わっています。政治について直接的でなくとも、実は政治について語っているということです。表現手段やそのイメージがどんどん変わっていく中で、文学は、より美学的な側面、政治的から離れ純化された文学に傾いていくという事実があると思います。とはいえ、文学には物語を記録していくというナラティブに関わる取り組みもありまして、それが世界中で新しい形式をつくり出していると思います。

文学そのものに関しては、政治というものが明確な形、見える形で出ているわけではありません。絵に赤い点があっても、絵としては見えても赤い点は見えないのだけども、結局その赤い点は存在するということです。その赤い点が政治と考えれば、可視的ではないにせよ、やはり文学に常に政治というものが含まれているということです。コップに入った水一つ取っても、政治とは無関係ではないと私は考えておりまして、どのような形でも政治というものは切っても切り離されないものだと思います。政治家への不信があって、要するに脱政治的となる、そして脱政治的にするということ自体が戦いの場であって、実際にそれ自体が政治として行われているということです。大事な議論です。

福田：では、どんどんいきましょう。ありがとうございました。

質問者 5：ご講演ありがとうございました。私からは2つ質問があります。ヤズベクさんは、作家、ジャーナリスト、活動家などの仕事を通して、シリアの社会を変えようと女性エンパワーメントに貢献されてきたと思うのですが、仕事や活動するに当たって身近なモデルというか、活動の見本になったような人はいるのかというのが一つ目の質問です。

2つ目は、シリアの社会や女性に対する扱いを変えたいというような考えを持つことに対して、家族や友人など、身近な人がどういう意見を持っていたのか、どういう反応をしたのかについても知りたいと思いました。お願いします。

サマル：個人的には、自分が範型とするような主体的な理想のモデルはいないのです。小説の中ではもちろんモデルとなる人はいるのですが、決してそのままではな

くて、常に全く別の形に変わっています。私が10歳か11歳のころでしょうか、モデルとなったヒロインは、『不思議の国のアリス』のアリスでした。その後に自分の年齢によってヒーロー／ヒロインは変わりました。『星の王子様』もそうです。

私の中で憧れの人というか、モデルとするような人は、女性作家のヴァージニア・ウルフやシモーン・ド・ボヴォワールでした。ハンナ・アーレントやジュディス・バトラーなど、私の人生のステップの間でそれは常にいました。14歳のときはチェーホフが自分の中の憧れだったのですけれども、今はイタリア人作家のイタロ・カルヴィーノです。あるときはスピノザにすごく啓蒙されて、そしてまたあるときはポーランドの社会学者ジグムント・バウマンというように、自分の人生のステップにおいて、自分が理想とする、憧れる存在はどんどん変わっていく。そこはダイナミックな、弁証法的な関係であるので、そのように変わっていくということです。

福田：ありがとうございます。もう一つ、ご家族、身の周りの方々の反応はどうだったのでしょうかという質問でした。お母さんとか。

サマル：もう本当にひどいもので、今ここでは話したくないぐらいです。想像できないぐらいです（苦笑）。

福田：だそうです。ありがとうございます。次の方どうぞ。

質問者 6：今日はどうもありがとうございました。今度の東京での会に出られないものですから、今日は東京から来ました。私は今日読み始めまして、途中で電車の駅を乗り過ごしそうになって慌てました。まだ半分しか読んでおりません。ですので、まだ『歩き娘』の前半だけでお尋ねしているのですけれども、すごく最初の部分にダマスカスの町の中、シャアラーン地区の「怠け者市場」のことも書かれています。2018年に2日間だけダマスカスに行きましたけれども、「怠け者の市場」で野菜が同じように売られていました。

それで、一つは「歩く」ということで、恐らくこの主人公が非常に自主性というか、自律性というか、主体性を持って歩くということを常につないで、「足」を非常に重視した形で活動的な生について書かれている小説だと思いました。レバノン人作家アミン・マアルーフ¹¹が著書の中で「自分は木が嫌いだ、根を張って動けなくなる。その代わり人間には歩くために足があるのだ」という趣旨で述べた表現を思い出しました。

質問なのですけれども、この中で、クルアーンのユースフ章の一節を引かれているところがあります。私はクルアーンのユースフ章はこういう章だったのだ、こういう一節があったのだと非常に印象的だったのですけれども、作家にこういうご質問をするのは非常に失礼なのかもしれないのですが、ここでユースフ章の一節を引かれたこ

¹¹ アミン・マアルーフ（1949-）：レバノン出身でパリ在住の伝説作家。

との意味はどういうものなののでしょうか。私も想像するところはあるのですが、なぜこのユースフ章の一節を引かれたのかということをお伺いしたいです。

それから、この主人公がクルアーンを暗唱できるという設定にされています。ここでイスラームというものをどのように位置付けされていたのか、その辺についてお聞きしたいです。

サマル：逆に、私は『星の王子さま』など他にもいろいろ引用しているのに、なぜそもそもクルアーンのユースフ章を引用したことが質問になるのかということをもっとお聞きしたいです。

質問者 6：それは、この翻訳の中で一節そのまま引かれていましたよね。もちろん『星の王子さま』などのいろいろな形で引かれているということは分かったのですが、そこは私には非常に印象的だったのです。

サマル：私は、そもそもクルアーンが普通に置いてあるような環境に生まれたので、クルアーンの有名人朗誦者アブドゥルバーシト・アブドゥ・サマド¹²の朗誦を聞きながら育ちました。私はクルアーンには創造的な言語を見出し、その物語に関心を寄せています。クルアーンには、一神教の聖典の物語が詰まっています。その豊かさというものは、音楽的なものであったり、少なくとも当時、いろいろな物語を集合させたものであり、そして文学の先生のような存在です。要するに、固定観念を排し、政治とイスラームをきちんと分離して、アラビア語で書かれた文学的なイスラームというものをもう 1 回見直したときに、その途方もない豊かさは私たちの財産であると思っています。私はタラファ・イブン・アブド¹³やムタナッビー¹⁴をはじめとするいろいろな古代・中世の詩人の詩を読みますけれども、それも近代の T・S・エリオットを読んでいるような気持ちになります。私はアラブ・イスラームの遺産に対してその豊かさにおいて向き合っており、宗教と政治を結び付けているわけではないのです。この問題は複雑なので、時間があればお話しします。

アミン・マアルーフの言葉ですが、彼は友人で尊敬しておりますが、要するに根のない樹木、根無し草について書いていますけれども、私は全く正反対の立場をとっています。それは、私には根があって、ただ枝や葉は世界に伸びていく。私はフランス国籍を取っていますが、根はやはりシリアにあります。それが私の立

¹² アブドゥルバーシト・アブドゥ・サマド（1927-1988）：エジプトのクルアーン朗唱者。イスラーム世界で近代史上最も影響力を持ったクルアーン朗唱者 4 人の 1 人とされている。

¹³ タラファ・イブン・アブド（543-546）：ジャーヒリーヤ時代のアラビア半島におけるムアッラカート（長詩）詩人。

¹⁴ アブー・タイブ・ムタナッビー（915-965）：イラクのクーファに生まれ、シリア各地を放浪し、アレppoやエジプトなどの宮廷で抒情詩をうたったアラブ詩人。

場です。

福田：ありがとうございます。そろそろ時間ですが、あとお一方ぐらいなら何とか。どうぞ。

質問者 7：もし差し支えなかったらフランス語で直接サマルさんに質問したいと思いますが。次の小説をもし書くならフランス語で書こうと思いますか。

サマル：全く思いません。フランス語は、私にとっては読むための言葉です。知識を得るためです。骨の上に肉があって、肉だけ別にあっても仕方ありません。やはり私にとって骨は唯一のアラビア語で、それが私が属している根となる唯一の最終的な言語なので、その言語で書くというのが基本です。アラビア語は唯一の安定している場であり、放棄することはできません。最も重要な国なのです。マフムード・ダルウィーシュという有名なパレスチナの詩人は、「私は私の言語である」という詩を残しています。

福田：ありがとうございます。では、時間になってしまいましたので、最後に。

岡崎：少しサマルさんを利用して、『歩き娘』とほぼ同時期に発売された私の翻訳書であるカーシム・アミン『アラブの女性解放論』¹⁵も紹介していただければと思います。

サマル：アラブ世界で 100 年以上前に最初に女性解放論を展開した人がカーシム・アミンという人です。私は、アラブの女性解放の先駆者とみなしているのですが、それが男性だったというのはちょっとおかしいのですけれども、重要な本です。顔は少しフランスのマルセル・ブルーストと似ています。それは冗談ですけれども（笑）。

福田：というわけで、今日はどうもありがとうございました。皆さん、雨の中を東京から来てくださった方もいらしたということで、本当にどうもありがとうございました。

（了）

¹⁵ カーシム・アミン著『アラブの女性解放論』岡崎弘樹・後藤絵美訳、法政大学出版局、2024 年。

講演録
シリアの文学と女性作家
講演 サマル・ヤズベク

司会 福田義昭 新刊紹介 柳谷あゆみ 通訳 岡崎弘樹

作成：ワタン研究プロジェクト
編集：岡崎 弘樹
編集補助：西道 奎
発行：2025 年 10 月 26 日
連絡先：プロジェクト・ワタン事務局
projectwatan3@gmail.com
<http://www.projectwatan.jp/>

©Hiroki OKAZAKI, Samar YAZBEK 2025